ボブべっくのやさしい投資信託

第４２回　ファンドの選び方　その４

（９）ファンドの選び方
（9-C）標準偏差とその使い方

①標準偏差とは

前回、リスクとは標準偏差の事だと説明しました。では、標準偏差って一体何でしょうか？簡単に言うと**平均からのぶれ**の事なのです。下の表を見てください。これは二つのファンドの年間上昇率とその平均を計算したものです。

西暦	96	97	98	99	00	平均
Aﾌｧﾝﾄﾞ	2%	3%	1%	3%	1%	2%
Bﾌｧﾝﾄﾞ	5%	▲2%	6%	▲1%	2%	2%

どちらのファンドも上昇率の平均値は２％です。みなさんならどちらのファンドを選びますか？Aは平均値２％に対し、その上下１％の範囲内に納まっています。しかし、Bの方は、良い時には平均値より４％も高い上昇率ですが、悪い時には平均値より４％も低い上昇率となっています。Aの方が、**ぶれ**が小さいですね。平均値からの**ぶれ**が小さい方が、より確実にその平均値を達成できると考えられます。つまり、この表を見る限り、Aの方が、**より確実**に２％近い上昇率を達成できると予想できるのです。

この**平均値からのぶれ**を統計的に処理したものが標準偏差なのです。標準偏差が大きいと言う事は、ぶれが大きい、つまりリスクが大きいのだと理解しましょう。

②標準偏差の意味

では、この標準偏差が何を意味しているのか詳しく説明しましょう。標準偏差が５％のファンドがあったとします。これは、ファンドの月間上昇率を調べてみると、３回のうち２回は（基準価額の騰落率の平均値）±５％に収まっていたという事を示しているのです。そのファンドの月間上昇率の平均値が 10%であれば、３回のうち２回は、５％～15%の上昇率になるという事です。では同じく基準価額の月間上昇率が平均で10%、標準偏差が１％だったらどうなるでしょう。この場合には、ファンドの月間上昇率が、３回のうち２回は９％～11%になるという事を表しているのです。式で表すと下式のようになります。

予想基準価額騰落率＝
過去の基準価額平均騰落率±標準偏差
（３分の２の確率でこのレンジ内に収まる）

例１　基準価額平均騰落率 10%、標準偏差 5%の場合
予想基準価額騰落率＝10%±５％
＝５％～15%
３分の２の確率で、基準価額騰落率は５％～15%のレンジに収まる。

例２　基準価額平均騰落率 10%、標準偏差１％の場合
予想基準価額騰落率＝10%±１％
＝９％～11%
３分の２の確率で、基準価額騰落率は９％～11%のレンジに収まる。

（注）この指標は、年間上昇率を使っても日々の上昇率を使っても計算できます。自分で計算したい方は、エクセルの STDEV という関数を使いましょう。

いかがでしょう。標準偏差が５％の場合よりも、１％の方が、**より確実に** 10%の利回りを達成できるという事なのです。言いかえれば、標準偏差が 5%のファンドよりも 1%の方がリスクが低いと言えるのではないでしょうか。

③標準偏差を使ってファンドを選ぶ

ではリスクが高いファンドよりもリスクが低いファンドの方が良いファンド、購入すべきファンドなのでしょうか？そんな事はありません。リスクが低い事と、運用成績の良し悪しは別なのです。

大切な事はリスクの大きさではなく、リスクに見合ったリターンが得られるのかどうかという事なのです。同じリスクであれ

ばリターンは高いほうが良い。同じリターンであれば、リスクは低い方が良い。この原則を守る事なのです。次回はこの事に焦点をあてて、ファンドの選び方を考えてみましょう。